宿場町
ひらかた

第85号

発　行
宿場町枚方を考える会
会長　堀家　啓男
072-892-5504

事務局
枚方市出口2丁目6-6
上野幸夫　072-832-5722

編集 広報委員会

主な内容

○社会教育部と懇談（1頁）
○丸子宿大会に参加（2頁～3頁）
○尊延寺地域を散策（4頁～7頁）
○木之本宿と雨森芳洲庵（8頁～13頁）
○枚方の領主支配の変遷（14頁～20頁）

社会教育部と懇談

本会要望の歴史博物館

重要性を認識

本会は平成28年11月17日、市の社会教育部と懇談、本会が同年9月6日に伏見隆枚方市長へ要望した「市立歴史博物館の府下における設置実態の調査と整備について」の回答を受けました。

回答は要望事項に沿って五項目にわたっていますが、紙面の都合上、要望の中核である「歴史博物館の整備」についての回答を記載します。

「（略）市民の地域に対する誇りや愛着、郷土愛を醸成するために、また、枚方の魅力を広く発信していくために、歴史博物館のような施設は重要な役割を果たすものと認識していますが、既存施設との関係をはじめ整理すべき問題が多くあり、整備については今後の課題と考えています」。

以上が市長からの回答です。本会としては、「歴史博物館は先人が築いてきた歴史を時代ごとに顕彰し、次代に継承しながら、市民の郷土愛を高め、文化の発展を図る重要な施設」として、今後とも整備実現に向けて要望していきたいと考えています。

今回の懇談には、社会教育部から中路清社会教育部長、片岡政夫社会教育部次長、鈴江智副参事兼文化財課長、川口政芳文化財課課長代理が出席、本会からは堀家啓男会長を始め、松中喜一郎、伊豆田敏和、石川勲が出席しました。

懇談の様子（左が本会、右が社会教育部）

第29回東海道シンポジウム
丸子宿大会に参加

八幡市　榊原　啓雄

「歴史を越えて蘇る宿場町」をテーマに、東海道シンポジウム丸子宿大会が11月5日、6日に開催されました。当日は秋晴れ、ちょうど大道芸ワールドカップも駿府城周辺で開催しており、静岡駅は観光客で溢れていました。

丸子宿は、駅からバスで25分ほど離れた西部地域、正式な地名は「静岡市駿河区丸子」と表記されています。この丸子の中心地にある長田西小学校の体育館が大会会場です。

第一目は、講演会とシンポジウムです。

講演の講師は、東洋文化研究者で著述家でもあるアメリカ出身のアレックス・カーさんでした。日本各地で取り組まれている地域興しなどをパワーポイントで説明されました。「単に宿場町の問題だけではなく、古き良き日本の伝統を守っていくには、どうしても予算の問題が生じてくる。行政関係者にどのような形で組織に入ってもらうのか、ここにもっと知恵を出す工夫が必要」という指摘が印象に残りました。

シンポジウムは、アレックスさん、品川宿、宮宿、丸子宿の代表者と司会者の5人で行われました。「東海道宿場町の歴史的背景やポジションを認識した上で、現代にマッチした地域活性化の手法を探る」というのがシンポジウムのねらいでしたが、参加者への資料配布もなく、討論会はやや不消化の様子でした。

シンポジウム会場

人口の減少により産業全体が厳しい状況で、「救うことができるのは観光業」「楽しさがあるかないかがカギ」「景観が大切」「若者を引き込むこと」「宿場の紙芝居を各学校で」…などの報告がありました。

最後に司会者とアレックスさんのまとめは、「予算確保はどうするのか？」「企業化が必要」「お祭りの企画はどこもしているが、その後が大切」「観光業化をどうするか？産業振

興化していくためには？」という問題提起でしたが、これらの課題を掘り下げるためには行政関係者の参加が不可欠だと思います。今後の東海道宿駅会議の参加者枠の拡大を期待したいところです。

参考までに「東海道歴史街道二峠六宿」を紹介します。

江戸時代に整備された東海道は、大名行列を始め、旅人の往来で活気に溢れていました。静岡市には、蒲原、由比、興津、江尻、府中、丸子の六宿があり、さらに東海道での難所といわれた薩埵峠と宇津ノ谷峠の二つの峠を有します。富士山を望む絶景とともに、旅道中のハイライトとして多くの旅人に愛された「二峠六宿」の情緒や面影は、今もそこかしこに残っています。

六宿の中で一番西に位置しているのが「丸子宿」です。宿場には、本陣、問屋場などは残っていませんが、古の旅人が眺めた自然の風景や旅の雰囲気は十分に感じられるところです。

天保14年（１８４３年）の「東海道宿村大概帳」によりますと、「宿内人口七百九十五人、宿内総家数二百十一軒、本陣一軒、脇本陣二軒、旅籠屋二十四軒…、農業の他に旅屋、又は食物を商う、長芋のとろろ汁業はこの宿の名物なり」と記述されています。この丸子には、現在でもとろろ汁のお店が何軒かあるそうです。特に有名なのが、松尾芭蕉に詠まれ、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」や歌川（安藤）広重の浮世絵にも登場するお店で、慶長元年（１５９６年）創業の「丁子屋」です。多くの旅人がとろろ汁を目当てにやってきたそうです。

自然薯をすりおろし、風味豊かなだし汁と味噌汁でのばした「とろろ汁」は、静岡を代表する郷土料理としての伝統を守り続けています。

二日目の午前は、歴史街道散策です。丸子宿付近の散策と宇津ノ谷集落散策の二コースを地元のガイドさんに案内していただきました。私は、丸子宿コースを選び、丁子屋14代目のご当主から、歴史ある店を守る苦労話などを聞かせていただきました。

丁子屋

伝統と歴史の継承のために店の中に展示空間を確保し、旅行者に伝統文化を味わってもらえるよう、様々な工夫をされていました。「展示品にも直接触ってもらい、歴史を意識してもらいたい」とのお話は印象的でした。

最後に、宿場の話題ではありませんが、大会に参加して初めて丸子が「日本の紅茶発祥の地」だということを知りました。

無農薬・有機栽培で育てられた緑茶の茶葉から作られた丸子紅茶は、澄んだ鮮やかな赤い水の色、渋みが少なく、さわやかな味わいが特徴だそうです。５日の夜、丁子屋での交流会参加者に配られた「丸子紅茶あめ」を帰りの新幹線で味わってみました。確かに素朴で上品な味がしました。

近郊を歩く会

尊延寺地域を散策

三栗　石川 勲

平成28年度第2回目の「近郊を歩く会」は9月25日、「枚方・尊延寺方面」と題し、会員など25人が参加しました。

「近郊を歩く会」は現地集合・現地解散が原則です。私は、枚方市駅南口から京阪バスの穂谷行きに乗り、その名も「尊延寺」のバス停で降りました。すでに多くの皆さんが待っておられました。近くのコンビニ前へ移動し、ガイド役の堀家会長からコースなど、簡単な説明を受けると出発です。

尊延寺

最初に向ったのは、地域の地名となっている尊延寺（そんえんじ／尊延寺６丁目）です。山門の傍らに設置された枚方市教育委員会の説明板などによると、聖武天皇の勅願により天平３年（７３１年）興福寺の宣教大師が創建したと伝えられています。創建当時は大伽藍をもつ荘厳な寺院だったといわれ、現在は高野山真言宗のお寺です。ご住職から本堂となっている不動堂に案内していただき、丁寧な説明を受けました。

不動堂には、ご本尊である等身大の不動明王を始めとする五大力明王（ごだいりきみょうおう）が安置されています。その姿に圧倒されましたが、幼子のような顔をされた地蔵菩薩には癒される思いがしました。

ご本尊に隠れるように大日如来坐像が安置されており、ご住職に「格下の明王が格上の如来を従えているように感じるのですが」と質問すると、「不動明王は大日如来の化身ですから良いんですよ」と教

えていただきました。正に「下種の勘繰り」でした。

五大力明王は平成16年4月1日に枚方市の有形文化財に指定されていましたが、うち軍荼利明王（ぐんだりみょうおう）と降三世明王（ごうざんぜみょうおう）の二躯は平成28年8月17日に国の重要文化財に指定されました。

←降三世明王　←軍荼利明王

枚方市内の仏像が重要文化財に指定されたのは初めてです。なお、同日付けで清泰寺（長尾元町1丁目）の菩薩坐像二躯も重要文化財に指定されています。

大塩屋敷跡

尊延寺の次は、「大塩事件（大塩の乱）」に所縁のある深尾家を訪ねました。大塩事件はご存知の通り、天保8年（1837年）に元大坂東町奉行所の与力であり、陽明学者であった大塩平八郎が飢饉に苦しむ民衆の救済などを訴え決起した事件です。大塩の門弟だった尊延寺（河内国交野郡尊延寺村）の深尾才次郎は、大塩に加勢するため、鉄砲などの武器を携え、村民数十人を率いて大坂に向いました。しかし、守口宿に到着すると、大塩が幕府方に敗れたと知り、村民に帰村するよう伝えた後、逃亡しました。

結果的に才次郎は加賀国で自決しています。才次郎の兄、治兵衛は大坂で大塩とともに挙兵しましたが、事件後に帰村してから大坂町奉行所に自訴し、獄死しています。

かつて庄屋であった深尾家を訪ねる前に、近くにある治兵衛・才次郎兄弟の屋敷跡（俗称大塩屋敷跡）に建つ「大塩平八郎の碑」（尊延寺2丁目）に寄りました。碑の表には「大塩中斎遺跡」、裏には「昭和47年6月21日深尾家建立」と刻まれています。

大塩平八郎の碑

碑を見学した後、深尾正先生のお宅を訪問しました。大勢でお邪魔したにもかかわらず、大変お世話になりました。大塩事件の関係資料を配布され、説明いただきました。座敷の床の間には、軸装された大塩平八郎の書と伝えられている古文書が掛けてあり、拝見することができました。

大塩平八郎の書

来雲寺

続いて来雲寺（らいうんじ／尊延寺5丁目）を訪問しました。ご本尊を阿弥陀如来とする浄土宗のお寺です。宣教大師が創建した尊延寺46院

の一つとして創基した寺で、その後、守口市佐太中町にある来迎寺（融通念仏宗佐太派、現在は浄土宗）の末寺となり、さらに現在の浄土宗に改宗しています。

来雲寺には、前述の大塩事件に係わる治兵衛・才次郎兄弟と母のぶの位牌や関与した村民14人の過去帳が残されています。

来雲寺

本堂に向って左側に大日如来の石像と2基の十三仏石板碑があります。

十三仏とは、初七日から三十三回忌までの13回の仏事を司る仏で、室町時代から始まった信仰といわれています。石板碑は故人を追善供養するもので、枚方市内で残っているのはここだけだろうといわれています。

大日如来　十三仏石板碑

左側石板碑のアップ

厳島神社

来雲寺と道路一つ挟んだところに厳島神社（いつくしまじんじゃ／尊延寺5丁目）があります。

厳島神社本殿

海上を守護する厳島神社は全国に約５００社あるといわれ、総本社は宮島の厳島神社です。尊延寺にある厳島神社の創建は、平安時代の末期または鎌倉時代の創建といわれています。

現在の本殿は、文久3年（1863年）に奈良の春日大社から旧社殿を譲り受けたもので、従来の社殿は本殿の右側にある末社の春日神社本殿として移築されました。春日神社の本殿となった厳島神社の旧社殿は、室町時代の建立と推定されています。

京都府との境に近いため、大阪南部とは異なる手法があ

り、地域的特色を持つ中世の遺構として昭和53年に国の重要文化財に指定されています。文化財的にはこちらが主役になった感があります。

建物の出処については既述しましたが、さらに複雑なのはご祭神です。

厳島神社の祭神は総本社である宮島厳島神社の祭神とは異なり、建物を譲り受けた奈良春日大社の祭神と同じ、武甕槌命、経津主命、天児屋根命、比売命の四祭神です。

一方、末社の春日神社も、奈良春日大社の四祭神ではなく、宮島厳島神社の主神である市杵島姫命です。神社名と祭神が入れ替わっているように思いますが、これも「下種の勘ぐり」ですね。

なお、ネット上では一部異なる祭神名もありますが、ここで記載した内容は、大阪府神社庁第三支部のホームページを転載したものです。

ご祭神について云々する不敬をしましたが、境内をお借りして持参したお弁当を食べました。「近郊を歩く会」の楽しみの一つです。

食事後は、近くにある大塩事件の治兵衛・才次郎兄弟と母のぶのお墓にお参りし、合掌しました。

三之宮神社

散策最後の訪問地は、厳島神社から南へ徒歩15分の三之宮神社（さんのみやじんじゃ／穂谷2丁目）です。

社伝によると仁徳天皇29年（341年）の創建とされ、古くは穂谷、津田、尊延寺、藤阪5ヵ郷の鎮守社でした。地元の言い伝えでは、慶長年間に豊臣秀頼が大坂城鬼門鎮護のため交野郡の一之宮（片埜神社）、二之宮（二之宮神社）、三之宮を修復したことにより、当社に三之宮の社名が定着したとされています。

三之宮神社は、中世から「雨乞い」の神社として崇敬されてきました。

雨乞いでは、境内に千燈を掲げて大般若経を読みます。いくら祈願しても雨が降らないとなると、村民は鐘や太鼓を打ち鳴らしながら境内に入り、水神様といわれている「立石」を神社の西側を流れている穂谷川の源流に突き落としました。すると、神様が怒って雨を降らせるのだそうです。

願いが叶うと、村民は「立石」を引き揚げました。境内にある石灯籠も多くは雨乞いのお礼に奉納されたものです。

「立石」は高さ1mほどですが、社殿の裏にはさらに大きな石が2個あります。断面が三角形をしており、屋根形しているところから屋形石と呼ばれ、三之宮神社が別名「三之宮屋形大明神」の呼ばれている由縁です。玉垣で囲まれており、立石と同様、神社の御神体となっています。

28年度
バス見学会

木之本宿と雨森芳洲庵を訪ねて

船橋本町　上谷　勝己

本会の主要事業の一つとして、晩秋の11月30日に滋賀県長浜市を訪ねました。会員など35人がラポール横に集合、観光バスに乗車すると、午前中は長浜市木之本本町木之本にある北国街道木之本宿、午後は同市高月町雨森にある東アジア交流ハウス雨森芳洲庵を訪問しました。

木之本宿

バスが午前11時にJR木ノ本駅前に着くと、ボランティアガイドさんが待っておられました。さっそく、北国街道を案内していただきました。

北国街道とは

中山道の鳥居本宿から分かれて琵琶湖の東側、米原、長浜、木之本（きのもと）を北上し、金沢・富山を通って上越市の高田から南下、長野を通って追分で中山道に合流する道が北国街道と北陸道です。その中で鳥居本から今庄までと、追分から高田までを北国街道と呼んだようです。本来、北陸道は加賀前田家が参勤交代で江戸へ向かうために整備した街道だったようです。

北国街道

滋賀県の北国街道は、この他に木之本と関ヶ原を結ぶ北国脇往還や、脇往還の途中から浅井家の居城小谷を通って米原に至る小谷道などがあったようです。江戸時代、北国脇往還は北陸諸藩の参勤交代として大名行列も通りました。

木之本宿

木之本は、木之本地蔵院の門前町として、また北国街道・北国脇往還の宿場町として古くから栄えてきました。特に北国脇往還は賤ヶ岳合戦の際に羽芝秀吉が大垣から木之本の間（約52㎞）を約5時間で駆け抜けた「大垣大返し」の道として知られています。近畿・東海と北陸を結ぶ要衝の地で、古代は大陸からの文物の通り道として、また戦国時代には多くの武将の行き交う道として、江戸時代には宿場町として、大名の参勤交代や交易の旅人で賑わい、旅籠や商家が軒を連ねていました。

木之本宿には昭和の初めまで通りの中央に小川が流れ、柳の木が植えられた宿場らしい風情が残っていました。現在は埋め立てられていますが、古い商家の家並みに当時の風情が残っています。旧家の軒下の柱には今なお馬つなぎの金具があり、うだつや紅殻格子の家並に往時をしのぶことができ、重要伝統的建造物群保存地区に指定されています。

木之本地蔵院

木之本は「やなぎもと」と呼ばれた昔からお地蔵さまの門前町として栄えてきました。眼病平癒の仏様として知られる時宗の寺で、正式な寺号は浄信寺（じょうしんじ）といいますが、一般的に木之本地蔵院（きのもとじぞういん）と呼ばれています。

本尊である地蔵さまは、むかし大阪湾の難波の浦に流れ着かれ、祚連(それん)上人がこの地に祀ったと伝えられています。

当寺には「身代わりカエル」の伝説があり、寺の池に棲むカエルが地蔵尊の願いにより、目を患った旅人に片目を与え、旅人は旅を続けることができたとの昔話があり、今でもお寺に棲むカエルは片目をつむっているといわれています。

手水舎のカエル

境内に立つ6メートルの地蔵像は秘仏である本尊を模しており、全国から訪れる参拝客を出迎えています。明治27年の建立で、材料となる銅は、近在だけでなく全国の信者から供出された銅鏡であったといわれています。

木之本本陣跡

軒先に古い薬の看板を吊るしてあるのが江戸時代に大名が宿泊した「木之本本陣跡」です。邸内には宿札(大名などの宿泊時に本陣前と宿の出入口に揚げた札)も掲げてあり、宿駅関係資料も残っています。

現在は「本陣薬局」となっており、日本で第一号の薬剤師さん宅です。掲示されている明治26年6月7日発行の薬剤師免状には、授興者「内務大臣従二位勲一等伯爵井上馨」、登録者「内務省衛生局長従五位後藤新平」という、歴史好きならお馴染の名前が記されていました。

木之本牛馬市

室町時代から昭和の初期までの毎年2回、街道の民家を宿として牛馬市が開かれました。江戸時代には藩の保護を受け、地元近江をはじめ、但

馬、丹波、伊勢、美濃、越前、若狭などから、数百頭以上の牛馬が集まり、盛況を極めたそうです。後に土佐藩主となる戦国武将の山内一豊が妻・千代の蓄えていた金子で買い求めたという名馬は、ここで買われたと伝えられています。

料亭 すし慶

昼食は「すし慶」でいただきました。

茶碗蒸しなどが追加された

創業は大正元年です。初代の慶三が大阪で修業した後、「伝統の味」として残る「鯖の棒すし」を大八車に積み、村々にて行商し、「すしやの慶さん」とご贔屓にしていただき、屋号もお客様から「すし慶」と付けてもらい、暖簾を守ってきました。

すし慶は蔵をギャラリーとして開放しています。この「蔵」は、役所・税務署・江北銀行・江北図書館などを変遷して、昭和51年からすし慶に受け継がれて現在に至っています。天正11年（１５８３年）の賤ヵ岳合戦図「大岩山砦の攻防」が展示されています。

雨森芳洲庵

食事を終えると、長浜市高月町雨森にある東アジア交流ハウス雨森芳洲庵に向いました。雨森芳洲庵は、昭和59年に滋賀県の「小さな世界都市モデルづくり事業」の指定を受け、出身地である旧伊香郡高月町が雨森芳洲（あめのもりほうしゅう）の生涯、思想、業績を顕彰し、あわせて東南アジアとの交流・友好を図るために設置した施設です。

雨森芳洲

ここでは館長の平井茂彦さんから雨森芳洲と朝鮮通信使の説明を受けました。

説明中の平井館長

江戸時代 朝鮮通信使が東海道57次56番目の宿場町、枚方宿を通った話は聞いていましたが、詳しいことは何も知りませんでした。館長の説明を聞かせていただき、自分の無知を恥ずかしく思いました。「平井茂彦著・雨森芳洲」を購入すると、江戸時代、生涯学習の国際人として朝鮮外交に尽力した雨森芳洲の生涯、ふるさと近江から京都、江戸、長崎、対馬、釜山を舞台に、学問と外交、教育に懸けた雨森芳洲の偉大な人生が、読みやすく分かりやすくまとめられていました。

以降、本文では施設の説明ではなく、雨森芳洲について述べたいと思います。

芳洲の誕生

雨森芳洲は寛文８年（１６６８年）、近江国伊香郡雨森村（現在の滋賀県長浜市高月町

雨森）に生まれました。先祖は近江の武将浅井家の家臣・土豪で雨森の地を名乗ったことが記されているそうです。芳洲の祖先である雨森氏は、近江源氏の京極氏の被官で戦国末期に浅井家の豪族となり、湖北の名家といわれていました。織田軍の秀吉により小谷城が落城し、浅井一族は滅亡、雨森氏も没落しました。芳洲が生まれたのは、この時から95年後のことになります。

幼少のころの芳洲は、医者の子として学問の手ほどきを受けていましたが、父の医業を継ぐことを断念、儒学の道を歩むことになります。当時、木下順庵（1621年～1698年）が京都から江戸に出て雉塾（木門）を開いていました。芳洲が雉塾に入門したのは、順庵が江戸に出て3年ほど後の18歳の頃です。門下として300人もの人々が集まり、朱子学を学び、誌文の学習を繰り返す日々でした。雨森芳洲、新井白石、室鳩巣、祇園南海、榊原篁洲は、木門の五先生といわれました。

対馬藩に出仕

元禄2年（1689年）、芳洲は師の木下順庵の推挙により22歳で対馬藩に仕えました。これが、以後の芳洲66年間の生涯を決定付けることなりました。

対馬は日本の北西西、日本海の西の隅、朝鮮半島とは50㎞ほどの距離にある長崎県の島で、天気の良い日には肉眼で釜山が見えるという位置にあります。中国の魏の時代の歴史書である「魏志倭人伝」の中に、初めて対馬という漢字が当てられています。朝鮮半島に最も近い島ということから、古くから蒙古の襲来や日本人による朝鮮、中国の沿岸を略奪した倭寇（寇は賊・外敵をいう）の出現など、争いごとの場にもなっていました。対馬では寛元4年（1246年）、宗氏が阿比留氏に代わり全島を平定し、対馬の地頭代官となり、長年にわたり対馬を治めてきました。

長い間続いた倭寇の時代を経て、室町時代に入ると修好の契機が生まれ、「回札使」「報聘使」などと呼ばれていた双方の使節が往来するようになりました。その後「通信使」と呼ばれるようになり、善隣関係が築かれました。しかし、その後の日本は戦国時代に入り、通信使の派遣は中断しますが、この間も対馬では朝鮮貿易が盛んに続いていました。

芳洲が初めて対馬へ渡ったのは元禄6年（1683年）の秋、26歳の時でした。対馬藩主は、宗義智、義成、義真と続き、22代の義倫が藩主になっていました。

芳洲は元禄7年（1694年）春、藩主・義倫の参勤に伴い江戸へお供しています。

対馬と江戸の往来は、対馬から大坂までは船で、それから江戸までは陸路の旅でした。29歳となった芳洲は、対馬藩の名家であった小河新平の妹と結婚しました。そして長崎へ三度目の唐音稽古のため、新妻同伴で出掛けています。

朝鮮方佐役

芳洲は元禄11年（1698年）3月に対馬へ戻ってきました。同年7月19日、藩の「朝鮮方佐役（ちょうせんかたすくやく）」という職を仰せ付けられます。実質的な外交官になったのです。朝鮮との外交は対馬藩にとって最も重要な業務であったことから、朝

鮮外交を担う役職を設けていたのです。幕府から朝鮮との外交を委任されていた対馬藩ならではの職でした。朝鮮方の責任者である頭役には家老が当たり、佐役はその補佐役という職になります。当時の外交は筆談で意思疎通を図っていましたが、芳洲は「相手国の言葉が語れなくて何が交隣ぞ」と、中国語・朝鮮語をほとんど独学で学びました。

江戸時代の通信使

通信使という名称の外交は室町時代にもあり、足利将軍が行っていました。戦国時代に中断しましたが、江戸時代の朝鮮通信使は12回にわたり日本を訪れました。

通信とは「信（よしみ）を通（かよ）わせる」という意味で、鎖国の時代の中で、朝鮮・琉球とは「通信の国」として外交関係があり、中国・オランダとは「通商の国」として貿易が行われていました。

最初の３回は答兼刷還使といわれ、秀吉が朝鮮侵略のときに日本に連れてきた捕虜の人たちを迎えに来て送り返す役割があったのです。その後は将軍の代わりのお祝いなどに訪れました。漢城（現ソウル）から江戸まで往復３０００kmを半年から１年近くかけて往来しました。第２回目は京都伏見まで、第12回目は対馬までした。使節は、正使・副使・従事官という三使のほか、総勢４５０人から５００人規模の大使節団でした。

正使と副使の人形

一行は釜山から外洋船で対馬に向い、九州の島や瀬戸内の港町に宿泊しながら、大坂に着きます。淀川を渡船で京へ上り、その後は徒歩で東海道を江戸まで進みました。各地で文人たちと交流し、大陸文化を日本に伝える使者でもあったのです。途中、一行を見物する民衆が街道を埋め尽くし、また幕府の決めた馳走役が各地で豪華な饗応料理を準備して迎えました。

使節は国王からの手紙「国書」を将軍に届け、「返書」を受け取って国王に渡す役目を担っていました。将軍にとっても朝鮮通信使を迎えることは、膨大な経費を掛けた盛事であり、一世一代の盛大な出来事だったのです。

12回に及ぶ朝鮮通信使との交流のうち、雨森芳洲が係わったのは第八回正徳の通信使と第九回享保の通信使で、真文役（外交文書と応接の役）として二度にわたり通信使を迎えました。

正徳元年朝鮮国書奉呈行列図

隠居

二度の通信使真文役を終えると、精神的な空虚感、幾度も江戸と朝鮮を往き来する旅、さらに寄る年波からの肉体的な疲れなどが重なり、朝鮮方佐役の辞任を申し出ます。三度辞表を出し、ようやく享保６年（１７２１年）、23年間務めてきた朝鮮方佐役を辞職し、内々に隠居しました。

辞職を認めたものの、対馬藩は依然として芳洲を必要としており、享保9年（1724年）、側用人に命じています。また、享保13年（1728年）には特使として釜山の倭館に赴いています。

芳洲は藩に出仕していた時から著作を記していましたが、この頃から著述に専念するようになり、数多くの随筆集や和歌集を残しています。これらの著作物などは、雨森芳洲関係資料として国の重要文化財に指定されている文書もあります。芳洲は延享5年（1748年）3月、孫の連太郎が藩に出仕したことに伴い、家督を譲り公式に隠居しました。

八十八歳で永眠

芳洲は宝暦5年（1755年）正月6日、対馬日吉の隠居所で病気のため亡くなりました。10日の葬送は大雪降りであったといいます。芳洲の辞世の歌として伝えられたものは「油尽きともし火消ゆる時までも忘れぬものは大学の道」でした。お墓は長寿院の裏山にあり、対馬府中を見下ろすように建っています。左側に夫人の墓があり、「小河孺人之墓」と書かれ、芳洲より2年後に亡くなっています。小河とあるのは夫人の生家の姓で、夫婦別姓、孺人とは儒者の妻という意味です。

長寿院の前の余間家（よまけ）という隠居所には一本の松の木が植えられています。「やつれても一本松の常盤にて今もかわらぬ滋賀のふるさと」と詠んだ和歌は、この松にふるさと近江への思いを託したのかもしれません。

大正13年（1924年）、文教に貢献した功績により従四位に贈位されています。

参加者全員で記念撮影（雨森芳洲庵）

枚方市内の領主支配の変遷
大名や旗本陣屋跡を探る

交野市天野が原町　堀家 啓男

枚方地域での領主配置の特徴

幕府草創期（寛永年間）即戦体制

豊臣政権の残滓を一掃し、幕府支配を浸透させ、西国大名に対するにらみを利かせるため、淀藩の永井尚政、高槻藩（３万６千石）の永井直清の兄弟、京都所司代、大坂城代などによる変事即戦の八人衆体制が執られました。その一環として大坂城周辺、京都周辺には徳川直臣、譜代大名の領地が配置され、それは枚方にも及びました。

永井尚政（ながい まさなお）

寛永10年（１６３３年）10万石となり、下総古河から淀へ転封されました。河内にも知行所（領地）が与えられ、枚方宿４村（岡新町、岡、三矢、泥町）、楠葉、上島、下島、坂、渚、出口から守口宿に至る淀川沿岸、京街道の沿道及び国境の招提、尊延寺、穂谷の街道筋を始め、さらに船橋、招提、宇山、養父、小倉、村野、野、枚方、伊加賀、走谷、中振が与えられました。これらの領地は、軍事上と交通上の要衝となっていたのです。

久貝正俊（くがい まさとし）

２２００石の旗本。元和５年（１６１９年）に大坂東町奉行に任命され、交野郡内に１５００石が加増、さらに讃良郡内で２０００石が加増され、合わせて５７００石となっています。

正俊は天正９年（１５８１年）、秀忠の小姓となり関ヶ原で武勲をあげ「河内最北の守りを固めよ」との家康の内意を受けました。知行地の八田広（正俊の開発により福岡、後の長尾）には山根街道、中野（四條畷市）には東高野、清滝街道が通る交通の要地です。他の枚方地域では、杉、藤坂、津田、田口、片鉾があり、大坂東町奉行の役知も受けています。

長尾の正俊寺は、二代正世が正俊の名前を付けて創建した久貝家の菩提寺であり、墓所があります。長尾の開発に従事し、寛文６年（１６６６年）に亡くなった代官細谷善兵衛の墓もあります。

枚方地域に残った秀吉期からの旗本など

豊臣家の旗本で、関ヶ原や大坂夏の陣以降、徳川家へ随身した旗本領は旧来のままとしたため、枚方地域に五家あり、四家は明治まで続きました。

◎西川八右衛門　知行所104石（招提の一部）。貞享元年（1684年）に改易処分となりました。

◎越智　知行所390石、山之上(東)に37石。

◎船越　知行所6140石（楠葉の一部542石と禁野に360石）。

◎畠山　知行所3000石の高家。戦国期からの名家。交野私部に1077石を有し、代官(代官屋敷北田家が現存)を置きました。津田に134石。

◎長井又次郎　知行所184石。茄子作の一部に110石、他に公家日野家と八幡宮領、高槻藩永井家の領地が磯島にありました。

幕府中期（正保～寛政）軍事から安定へ幕府財政の確保

幕政が安定した正保期（1644年～47年）には、永井らの出先即戦体制から、出先の番方、役方が江戸に直属する中央管轄体制へと変化します。これを受けて永井尚政領であった、枚方宿、出口、枚方、伊加賀が上知され、幕領となりました。

万治元年（1658年）、尚政が致仕、領地を子に分与、さらに死後の寛文9年（1669年）、嗣子尚征(なおゆき)が淀から宮津へ転封、ここに永井兄弟などによる軍事即応体制が終結します。

枚方地域における永井家領地分与への影響

尚庸（なおつね　尚政の三男2万石の大名となる）

枚方で村野、渚、小倉、坂、宇山、上島、下島、楠葉、招提、山之上の旧永井領などを支配。次男直敬（なおひろ）のとき、烏山3万石へ移り、枚方を離れました。その後、江戸城松の廊下での浅野刃傷に伴い、断絶直後の赤穂城主となり、以降も転々とし、その間、幕府要職を歴任、尚陳のとき美濃加納藩3万2千石となり、やがて明治へ。

直右（なおすけ　尚政の四男7000石の旗本となる）

枚方で野、養父、船橋の旧永井領などを支配。延享（1744年～47年）の頃、門真の領地野口村の宇野家が永井領の大庄屋を勤め「仕送役」に任ぜられました。（参考・市史年報第6号）

尚申（なおのぶ　尚政の六男3034石の旗本となる）

枚方で穂谷、尊延寺、船橋の旧永井領等を支配。後に享保2年（1717年）、直允（なおちか）のとき、兄弟で分割し、2034石と1000石の旗本となりました。

枚方地域における幕府領の増加

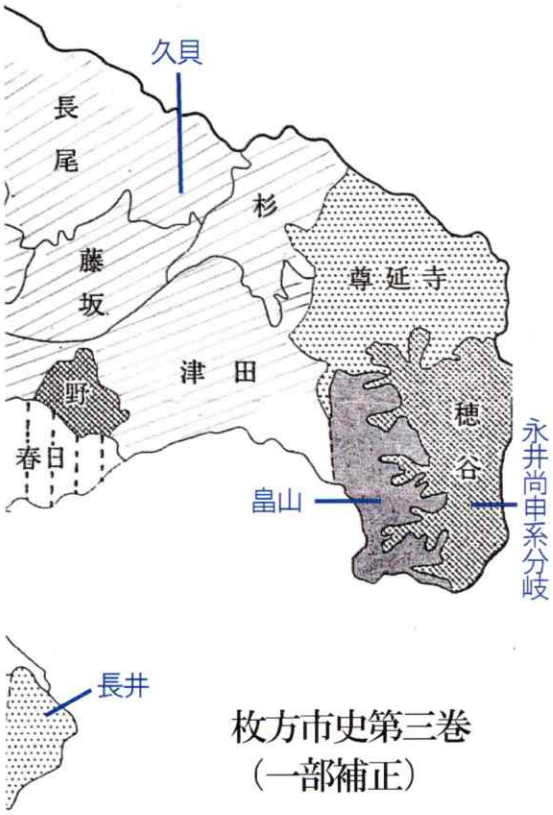
元禄元年（1688年）以降は、幕府財政の悪化により幕領への配置換えが増え、枚方での幕領が増加します。幕府は収入増のため、延宝検地（1679年）を実施しています。

元禄7年（1694年）、譜代小田原藩主老中大久保忠朝に、河内　交野、讃良、茨田3郡で約1万石加増。家康時代の忠隣の改易の後遺症による幕府の気遣いでしょうか。

枚方で春日、片鉾の一部、甲斐田、禁野、小倉、坂の一部、田宮、山之上、茄子作の４５１３石が幕末まで続きます。交野森では二宮金次郎の報徳仕法（栃木県桜町での農村復興策の応用）が行われました。（参考・交野市史）

この頃、枚方地域の領地は、幕領45・８％、小田原藩領22・９％。旗本９家領29・７％（うち久貝家13・１％）でした。

宝永２年（１７０５年）、幕領であった上島（７８石）、坂（３７１石）が水野家（５７００石の旗本）の知行所なり（「三浦家文書の調査と研究」馬部氏論文）、京街道筋の要所２か所に幕府ゆかりの直臣旗本の領地が現われた。東部の久貝家５７００石に相対する知行高です。



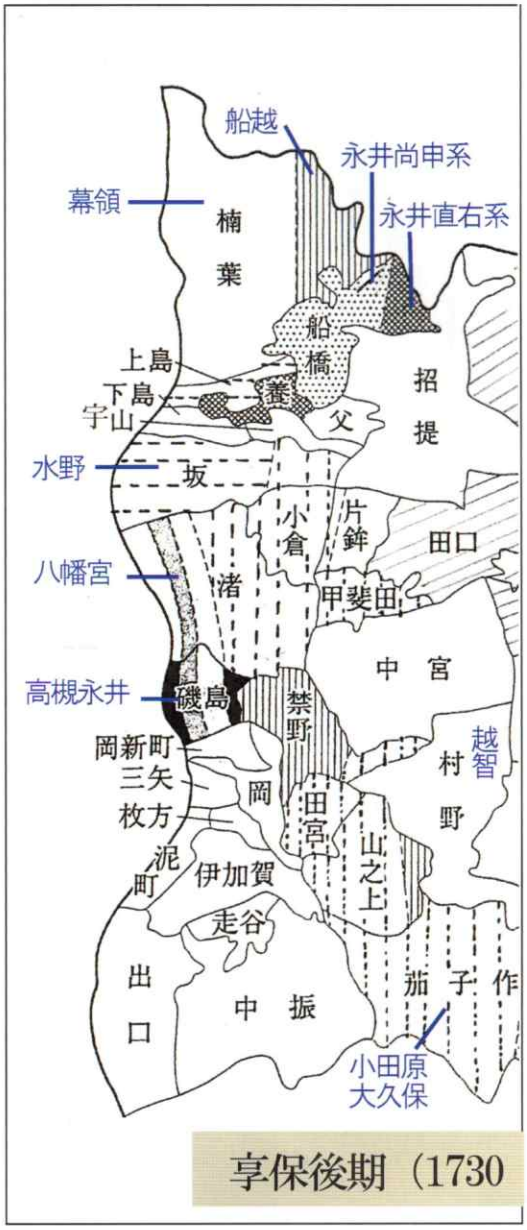
年）頃の枚方市域の所領配置

幕末期 尊攘派への備え 京都守護の配置

天保11年（１８４０年）、枚方宿４村と出口、走谷、中振、枚方、伊加賀の幕領を高槻永井藩の預所（あずかりどころ）とし、譜代大名の軍事力に京大坂間の交通の要衝を任せました。文久２年（１８６２年）、幕領であった、村野、宇山、中宮、養父の一部、招提の一部を京都守護職松平容保（会津藩主23万石）の役知１万石のうちの約３千石としました。

容保の進言により、幕府は尊攘派や長州藩を警戒するため、楠葉村を通る京街道の一部を引き込んで関門としての機能を併せ持つ砲台を設置しました。現在の楠葉中之芝２丁目にある楠葉台場跡です。設計の総責任者は勝海舟で、慶応元年（１８６５年）に完成しました。「稜堡式」という西洋式築城技術で建設され、面積３万８千㎡、３ヵ所の砲座がありました。

それから１世紀半後の平成23年、「楠葉台場跡」として国の史跡に指定され、史跡公園として開放されています。



享保後期（1730

幕府や旗本の領地支配

幕領は幕府が任命した代官が民政を行いました。代官は御目見（おめみえ）以上の者から任命され、多数の村を所管しました。

中宮の代官は上林又兵衛、村野が鈴木小右衛門というように隣村でも異なり、代官所もそれぞれの代官屋敷ということで、村役人はその屋敷に行くことになります。

代官の多羅尾、角倉、小堀、上林は、枚方の古文書によく出てくる名前です。代官の属吏に手付と手代がいました。手付は幕臣から派遣、勘定奉行が任命し、手代は農民からも任命され、事務見習いの書役を経て就任します。

旗本は、江戸在府が原則で、知行所全般を支配しやすい自領の要地に陣屋を設け、代官を置き、村民は代官の支配を受けました。大旗本の場合は、江戸の家臣から代官もしくは領主の意向を反映する家臣を派遣し、さらに在地の有力者（百姓出身も含む）からも代官を任命しています。

中小の旗本は、在地の庄屋や有力百姓から任じた代官を置くことが多かったようです。

各領主は、村人と土地を石高に換算して支配（領主的土地所有という）し、村に複数の領主（相給といい枚方地域で多い）がいる場合、村役人が協議して石高の比率により、田と農民を分別しました。このため隣同士で領主が異なることもありました。

村役人として、庄屋、年寄、百姓代の村方三役が置かれました。相給の場合は、領主の数と同じセット数の村役人がいたことになります。庄屋の最大の任務は年貢の完納で、これを完遂するために村政を担っていました。年寄は庄屋の補助者、百姓代は百姓を監視し、またその意見を代弁しました。村にとって良き領主とは年貢の率が低い領主であり、村との関わりは年貢のみで、大概のことは村で解決しました。領主が領地に来るこ

とは殆どありませんでした。

三河吉良の領主であった吉良上野介が「赤馬」の名君として現在も吉良（西尾市）で慕われているのは、稲作の治水（堤防事業の金銭負担）に貢献したからでしょうか。

枚方の陣屋 大名2、旗本3

枚方には大名2家、旗本3家の陣屋が置かれていました。

久貝陣屋

元禄2年（1689年）、久貝家三代正方が長尾村に陣屋を設けています。東西60間、南北30余間、御殿、代官詰所など。（参考・枚方市史第3巻）河内最北の守りとしての大規模な陣屋でした。現在、陣屋跡は住宅や駐車場になっています。陣屋の門は津田の円通寺（津田元町2丁目）に移設されています。

円通寺山門
（旧久貝陣屋門）

後の加納藩永井家陣屋

万治元年（1658年）、三男永井尚庸（2万石）が渚の渚山に屋形（御殿）を設けましたが2年で江戸に去り、その後郡代が貞享4年（1687年）まで居住しています。領内を視察した尚庸は、歴史に残る渚の院跡の式微を嘆き、院跡を整備して桜を植樹しました。これを記念し、尚庸が家臣に命じて建立させた「渚院碑」が院跡に残っています。

碑の撰文は林鵞峰で、格調高い名文です。私は、尚庸の御殿が御殿山の地名の始まりであることや、渚の院跡の歴史的重要性を認識させた尚庸こそ、正に枚方の生んだ名君だといいたいのです。

渚院碑

翻刻碑

寛文元年（1661年）に建てられた碑が劣化したため平成14年に再建。

明治まで続く尚陳（なおのぶ）以降の城持ち大名である永井加納藩の陣屋は宝永元年（1704年）、守口の佐田へ移ります。御殿山に「牢の坂」の地名（参考・旧枚方市史）が残るとされる現在の御殿山生涯学習美術センター（元大阪美術学校跡）の付近です。発掘調査で陣屋跡と思われる遺構が見つかっています。

大阪美術学校の碑

御殿山生涯
学習美術センター

後の宮津藩本庄家陣屋

御殿山には元禄元年（1688年）から同6年まで村野、

渚、坂、宇山、下島などを領した綱吉の母桂昌院の弟本庄宗資(笠間2万石)が陣屋を新築しました。(参考・旧枚方市史)　本庄は後に松平と改姓します。資俊のときに、桂昌院と綱吉が江戸屋敷にお成りになり、2万石加増、後に7万石となっています。

桂昌院（従1位、この伝達の勅使接待の際、馳走人浅野殿の松の廊下刃傷事件が起こる）への綱吉の親孝行の一つで、宗資は桂昌院の義弟にあたり、「玉の輿」のおかげということです。さらに浜松、宮津に転封して明治を迎えています。

旗本永井家船橋陣屋

六男尚申（直允、直丘、直該、直高と続く）の陣屋は船橋（船橋本町1丁目）に設けられ、東西25間、南北21間、403坪ありました。

旗本永井家船橋陣屋跡

幕末、寝屋川葛原の上堀三右衛門が代官となっています。同家（葛原2丁目）の長屋門は陣屋から移したものです。

移設された長屋門

幕末の天保8年（1837年）、大塩の乱のあと領主が同じであった尊延寺の深尾才次郎（村人と平八郎の企てに参加）の義兄、庄屋治五平が事件を届け出たのはこの陣屋です。現在、陣屋跡は水田となっていますが、区画がきれいに残り、遺構の一部が発掘されています。

旗本水野家陣屋

寛政年間（1789年～1800年）水野備中守が坂・一之宮の岡田本房（もとふさ水野家の家老となり、後に陣屋代官を務める）の働きもあり、上島から坂に陣屋を移設しています。東西、南北ともに20間。場所は「牧野停留所より1町許り新道を東方に入った右手の畑地である（旧枚方市史）」となっています。河内、大和、近江の三国にわたる水野家の領地を支配したこの陣屋は、片埜神社北側の丘陵にあったようで、明治元年（1868年）3月には明治天皇が大坂行幸の際、小休され、また9月には上京した領主水野但馬守も暫時滞在しています。

陣屋跡といわれる地にはメロディハイム枚方牧野マンションが建ち、一部が小公園となっています。

旗本
水野家陣屋跡

寛政9年（1797年）建立の片埜神社一の鳥居（旧京街道沿い、阪神淡路大震災で倒壊）の石柱部材に陣屋代官で社務職でもあった岡田治左

衛門本房の名前とその肩書に「封主水野監物内（左写真）」と刻まれ、水野家歴代の名前、監物があり、水野家唯一の名残といえます。

この写真、何とか読めますか

本房は有能で旗本三家老の一人と称され、片埜神社の復興にも努めています。また、本房は坂の文人医師三浦蘭阪（御殿山時代の名君尚庸の家臣の家系）や二之宮神社の井上金橋とも交流があり、寛政の文人仲間でした。片埜神社の近くに蘭阪邸ゆかりの公園があります。本房の妻である逸（いつ）の紀行文「於くのあら海」は女流文学として高い評価を受けています。

幕末の水野家当主水野但馬守忠昌（監物ともいう、５７００石。河内９ヵ村、大和６ヵ村　近江９ヵ村。うち枚方地域では坂３７１石、上島７８石を支配）は慶応元年（１８６５年）５月、家茂の長州藩再征に加わっています。同月帰府、11月勤仕（ごんじ）並寄合となりました。

幕末、坂の上方知行所陣屋代官を勤めた吉川惣七郎の公用日記が「慶応事件記」です。惣七郎は水野家の領地上島の農民出身で、陣屋代官となり、上島の居宅から通いました。代官は惣七郎と、その親戚と思われる吉川絃十郎の２人で、江戸から派遣の水野家家臣１名と共同して業務に当たりました。惣七郎は幕末の世情、陣屋を取り巻く状況を的確に把握し、率先して御家存続に当たり、鳥羽伏見戦争の展開、幕兵の逃亡、長州藩の坂近辺での動き、村人の混乱などを事件記に残しました。その期間は慶応４年（１８６８年）１月から７月までの数ヵ月です。惣七郎は京都において朝廷に働きかけ、但馬守の嗣子継続に当たるとともに、新政府から水野家の本領安堵を勝ち取り、領主から褒賞を受けています。

参考　枚方市史第３巻、旧枚方市史、市史年報６号、徳川旗本八万騎総覧その他

新入会員紹介
（平成29年３月１日現在）

森本　峯生さん　楠葉中町
松井　茂夫さん　岡本町
塚本紀世子さん　出口

会員を募集しています

本会は、年数回の講演会や観光バスを利用した他宿場などの日帰り見学会、会誌（本誌）を発行しています。

会費は３６００円（１年度）です。入会をお待ちしています。ご希望の方は上野まで。電話（８３２）５７２２。